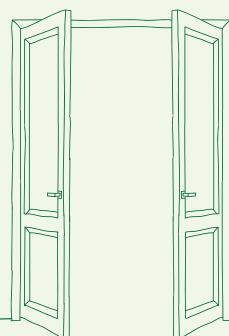


私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.39



教員を定年退職後、 「伝統工芸士」として、 地域の伝統技術の継承に尽力

元小学校教諭 **青木 基重さん (82歳)** 1999年3月定年退職

【あおき・もとしげ】1938年、福島県三島町出身。高校卒業後、家業を継ぐため神職養成所で修行し資格を得る。神職を務めながら玉川大学文学部教育学科で学び小学校教諭となる。校長を務めた後、定年退職。三島町生活工芸館で編み組細工を学ぶ。2012年、奥会津編み組細工総合部門伝統工芸士の認定を受け、現在に至る。



—青木さんは現役時代、小学校で33年間教鞭を執られていたそうですね。校長まで務めて定年退職された後、福島県三島町の伝統工芸である「奥会津編み組細工」の技術を習得されたとのことですが、どのようなきっかけで伝統工芸の世界に入られたのでしょうか。

会津地方にある三島町は豪雪地帯で、昔から農家では冬の仕事として、自然の樹皮や草を編んで生活道具を作る編み組細工が行われていました。私の母も冬になると蓑や草履、籠などを編んでいたんですね。その姿が子どもの頃からずっと記憶に焼き付いていて、退職後は自分も編み組細工による蓑や籠の作り手になりたいと思いました。

—作り方はどこで学ばれたのですか。

最初は、町の生活工芸館で開催された短期教室です。5日間で雨蓑を製作しましたが、母の姿を見て基本的な技法がある程度知っていたことが役に立ちました。

次に本を見ながら自力で籠を作ろうとしたのですが、途中でどうやってもできないところが出てきました。そこで編み組細工の先輩の門をたたき、さらに生活工芸館の教室にも入って研鑽を積んでいきました。

—「奥会津編み組細工」には、どのような種類があるのでしょうか。

山ブドウ細工の他、ヒロロ細工、マタタビ細工の3種類があります。ヒロロ細工は、ヒロロと呼ばれる野草を材料に手さげ籠などが作られています。レース編み

のような繊細な編み目が特徴です。マタタビ細工は水切れがいいので、ざる製品が多く作られています。山ブドウ細工の材料である山ブドウの蔓の皮は強度がある上、使っているうちにだんだんツヤが出てきます。手さげ籠なんかだと、使い込むほど味わいが増していきますよ。

どの細工も、まずは山野に入って材料を採取するところから始まります。その後、山ブドウであれば、蔓の皮を剥いで水に浸し、繊維に沿って8cmの幅に切りそろえていきます。こうして作った紐を編み上げていくんです。とは言っても、山ブドウの蔓の皮はかなり硬い。これを隙間を開けずにびっしりと編んでいくのは力がいらいますし、技術も要します。

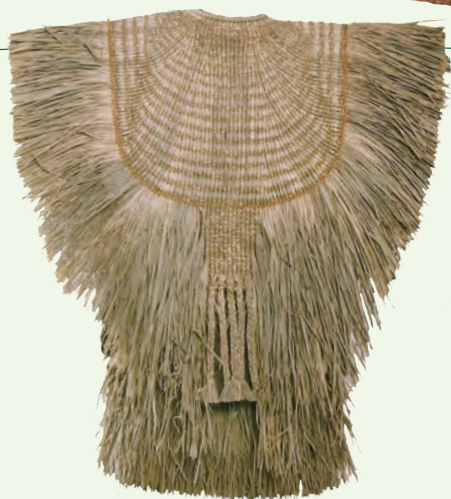
—青木さんは、具体的にどのようなものを作られているのですか。

私は山ブドウ細工を得意としていて、大中小とサイズの異なる籠や、財布を作っています。ヒロロ細工の大雨蓑も得意で、現在、三島町で大雨蓑を作ることができるのは私一人だけです。

—製作する工程で難しい点や大変な点は、どこですか。

1つ目は、材料となる自然の樹皮や草がどのような作品に適しているか判断することです。自然のものだから、同じ樹皮でも微妙に違っていて、それぞれの特性を見極めながら何を作るか考えるのが難しい。

山ブドウ細工による手さげ籠。
硬い素材ながら、きっちり編
み上げられた堅牢なつくり



ヒロ口細工による大雨蓑。レインコートとしてだけ
でなく、厳しい冬の防寒具としても重宝されていた



町のものづくり教室でも「伝統的技法を正しく伝える」ことを意識して指導

2つ目は、山ブドウの蔓の皮を水に浸して軟らかくする際、夏はカビが発生しやすく、それを防止するのが大変です。

3つ目は、自分自身の「技」不足から、常に課題が生じる点です。10個作っても、満足できる作品は1個しかありません。20年以上作り続けていても先輩方の作品のレベルには届かないもどかしさを常に感じています。ですが、それがあから、次の作品への意欲や活力がわいてくるのだと思います。

——青木さんは伝統的工芸品産業振興協会の認定伝統工芸士でもあるそうですね。

奥会津編み組細工は平成15年、2005番目の伝統工芸品として指定されました。各伝統工芸品の技術者は試験に合格すれば「伝統工芸士」として認定されますが、12年以上の実務経験がなければ受験資格は得られません。

60歳で山ブドウ細工を始めた私は72歳の時にようやく受験資格を得て、試験を受けました。全国一斉の筆記試験をパスし、試験官立会の下で行われた実技試験にも合格して、伝統工芸士として認定されました。有効期間は5年で、5年ごとに研修や講習会を受講すると更新されます。奥会津編み組細工では、現在10名が伝統工芸士として認定されています。

——やりがいを感じられるのは、どんな時ですか。

自分が満足できる作品を完成させた時や、その作品を買った方が喜ばれたり大事に使われている姿を見た時です。

——青木さんが今日まで奥会津編み組細工を続けられている理由は何だとお考えですか。

いくつかありますが、まずは作り手同志がお互いに励まし合い、作品の良さを認め合いながら、その技術を身につけていくことに喜びを感じられたからです。作品展で入賞できたことも自信につながりましたし、お客様が作品を認めて買ってくださいって現金収入が得られることも続けられている理由だと思います。

——今後やりたいことは何ですか。

私が今一番力を入れているのは、工人（職人）の育成です。指導した工人が私よりも良い作品を作り上げた時は、尊敬の念を覚えるとともに嬉しくなります。

町では長年ものづくりの文化を後世にも伝えていく「生活工芸運動」に取り組んでいます。私も傘寿を過ぎ力は弱くなってきましたが、健康を維持しながら生活工芸運動に労力を惜しまず注いでいきたいですね。

——最後に読者へメッセージをお願いします。

趣味と実益を兼ねたものづくりというものは、そう簡単に出合えるものではありません。定年後にもものづくりをしたいのであれば、若い頃から念入りのプランを考えておくことをお勧めします。

——お話し頂き、ありがとうございました。